

奥多摩の春



奥多摩

《第5号》

平成19年4月15日
奥多摩観光協会



木版画 安藤修二

～季節だより～

奥多摩の春は、4月の第2土曜日に行われる山開き式に始まります。奥多摩駅前にある大木戸稲荷神社で登山者の無事を祈願します。都民の奥座敷とか、憩いの場などといわれ、気軽に入山する人々が多い中で、最近は一歩の高齢者が目につくようになりました。奥多摩むかし道や多摩川周辺の遊歩道歩きならば安全度は高いのですが、1,000mを超える山となると話は別です。いつも危険と隣り合わせの登山に一人歩きはおすすめ出来ません。

遭難や行方不明等の事故内容を分析すると、ほとんどが当事者の山に対する認識不足に起因しています。いくら山開き式で安全・安心登山を祈願しても入山者の心構えひとつで幸不幸が分かります。奥多摩の山を甘く見てはいけません。

山行の前に当観光協会のHPにアクセスして季節・景観情報を把握したり、駅前の観光案内所で交通・登山道状況、クマやイノシシの出没情報など山の最新情報を確認の上、楽しい思い出に残る奥多摩登山にお出かけください。案内所には駅周辺の散策・ハイキング地図もありますのでご利用ください。

スプリングエフェメラルといえは、カタクリやアズマイチゲの花に代表されますが、4月の奥多摩は、地元で一番ツツジと呼ばれている紅紫色のミツバツツジの開花が春を告げます。

毎年4月29日に行われるヘルシーウォーク「むかし道を歩く」では、参加者1,000人を目標にイベントが行われます。この頃になると、谷川からミソサザイの透き通るような美しい声が聞こえてきます。運が良ければ、ムササビが巣穴からかわいい顔を出すこともあります。

5月は、まぶしいほどの新緑。目には青葉。ホトギスが鳴き、ジュウイチやカッコウは名前の通りの鳴き方をするのが面白い。ちょっと耳をすますと、ツツドリがポンポンと鳴いているのも聞こえます。これら4種類の鳥たちは、生みの親と育ての親が異なる、生まれながらにして要領のいい託卵鳥です。

ところで、奥多摩の山歩きを当観光協会に託してみませんか。責任をもってご案内します。四季折々にガイド付きの各種イベントを実施していますのでお気軽にお申し込みください。

ミズナラ巨樹とブナ林の観察

行先：日原・金袋山（一石山神社上）
開催日：7月11日（水）、7月27日（金）

終点の「日原鍾乳洞」で路線バスを降り、深く切れ込んだ小川谷の様子や、石灰岩の露頭が削り出す景色を楽しみながら歩くと、左手に目指すブナ林への入り口が見えてきます。

奥多摩では、どこに登る場合でもそうですが、ある程度歩き、尾根に出る頃になって、やっと緩やかな地形に出会えます。ここ金袋山でも同じで、最初は急峻な斜面をつづら折りで登り、後半になってやっと緩やかな道を辿るようになります。

目指す森は、ミズナラを始めブナなどの巨樹が見られる天然林で、その中心部はブナ林と呼ぶにふさわしい素晴らしい森となっています。

日本のブナ林は、日本海型気候帯か太平洋型気候帯かを問わず、林床に必ず笹類を伴っています。東京都内では三頭山のブナ林が、笹類が少ない森として有名ですが、それでも笹類が皆無な訳ではなく、多くはないものの、背の低いミヤコザサが見られます。

ところが、この森、いや、この森に至るまでの間に見られる森を含め、この小流域一帯には笹類が見られません。この状況を、ニホンジカの被害を受けた結果である、と唱える人もいます。しかし、枯れた後もかなり長く残る笹の笹の稈や肉厚の根茎が、平成12年当時で既に見られなかったことから、希有な存在ではありますが、もともと笹類が無かった森と考える方が妥当でしょう。

そして、この笹類が無いことが、この森の素晴らしさを際立たせています。まず、森を隅々まで見渡せるのがいい。次に道から外れどこにでも歩き回れるのがいい。それぞれに風格すら感じる巨樹たちに近寄れ、その木肌を間近で見られ、さらに触れることが出来るのも、この森ならではの楽しみ方です。もちろん、この森を代表するミズナラ巨樹も素晴らしい。いつ頃、そしてなぜ傾いたのかは不明ですが、倒れそうになりながらも踏ん張り、その後、特異な樹形を作り出してまでも生きながらえている姿には、感動すら覚えます。

この夏、この森を訪れ、ミズナラの巨樹とそれらを育んだ森の素晴らしさに触れてください。

（堀越弘司）

～ 行 っ て き た あ よ ～

鷹ノ巣山

雲取山から派生する石尾根にある鷹ノ巣山。ここからの眺めは、心に残る素晴らしいものです。

中日原でバスを降りると、目の前に水の流れるあるコンクリート水槽があります。冷たさを味わって、少し先の指導標から日原川に降ります。

日ノ戸橋を渡り、沢を行き来しながら登ると、やがて巨大な稲村岩が、覆いかぶさるように現れてきます。鞍部から岩頭への往復は、気をつけなければいけません。聳える岩頭に立つ爽快感は、また格別なものがあります。

鞍部からは本格的な登り道になります。左手が杉林の辺りのきついジグザグ登りも、スズタケの群生が現れ、ブナが目につくようになると緩やかになり、間もなくちょっとした平坦地に出ます。ここがヒルメシ食いのタワです。“ヒルメシ”はお預けして軽い腹拵えの上、最後の登りです。

ブナの紅（黄）葉を楽しみながらゆっくり登って鷹ノ巣山山頂に立つと、突然に雄大な景色が目

に入ってきます。富士山を中心に、三頭・御前・大岳の奥多摩三山を始めとした奥多摩の山々や、奥秩父の山並み、それに丹沢方面の山々の大パノラマで、これこそ山登りの醍醐味です。

昼食と展望を満喫して、いよいよ石尾根下りの開始です。ときおり現れる紅葉・黄葉を楽しみながら、防火帯を尾根の突端まで歩き、将門平に降り立ちます。ここからは、あまりアップダウンの少ない道をしばらく歩き、六ツ石山上り口に到着です。縦走路からちょっとはずれている山頂に一息で登ると、楽しんできた鷹ノ巣山方面の石尾根の連なりが眺められ、余韻に浸ることができます。

六ツ石山から下り一方の道を歩き、羽黒三田神社を過ぎると、ほどなく奥多摩駅に到着です。

鷹ノ巣山は、上り3時間強、下り4時間弱と、やや長丁場ですが、思い出に残る山行が楽しめます。

（高野義男）

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その3 ～

ツツジ咲く雲取山に死す

今年の山はツツジの当たり年のようだ。春早く、まだ木々の葉が芽吹かないうち、薄紫色に咲く「奥多摩町の花」ミツバツツジもいいが、遅く咲き出し梅雨時期にまで咲いているシロヤシオツツジやトウゴクミツバツツジ、ヤマツツジなどがいま、低く垂れ込めた梅雨空の下に、しっとりとして山の緑に映えている。

山村暮鳥に「こども」という詩があった。「山には躑躅が／さいてゐるから／おつこちるなら／そこだらうと／子どもがいつている／かみなり／かみなり／躑躅がいいぢやないか」。

6月11日、どんよりした梅雨空の午後2時ころ、奥多摩交番にいた私のところに、雲取山荘の新井信太郎さんから電話があった。日原林道終点から大ダワ林道を登ってきたパーティの女性が、大雲取谷に転落し、いま雲取山荘に救助を要請して来ているという。新井さんは遭難パーティのAさんという女性に電話を代わった。

Aさんという女性は電話で遭難の経緯を語った。「私達はMという登山スクールに参加し、大ダワ林道を雲取山に向かったのですが、途中でひとりが沢に転落しました。私達ふたりは救助要請に、いま雲取山荘に着いたところです。」という。「落ちたのは女性ですか男性ですか、何歳くらいの人ですか」と聞くと、「60歳の女性です。いま現場には6名います。リーダーが救助に谷まで降りていきました」と答えた。「負傷の程度はわかりますか」と問うと「はっきりわかりませんが、約50m下の沢まで落ちているので、何とか生きていてくれればと思う程です」との答えが返ってきた。

「分かりました、すぐに救助に向かいます」と言って、私は電話を切った。

相当の急を要する事態のようである。私はすぐ山岳救助隊の召集をかけ、奥多摩消防署にも出動の要請をした。午後2時25分、集まった救助隊員4名で先発をする。砂利道の日原林道を緊急で大雲取谷まで車を飛ばす。途中で出会った車から男女2名の登山者が降りてきた。事故を起こしたパーティのメンバーで、林道で会った車に乗せてもらい救助要請に向かうところだという。とりあえず一人だけ山岳救助車に乗ってもらい、案内を頼んだ。車の中で詳しい状況を聞いた。

それによると、パーティは「M」という登山スクールが企画し、雲取山登山に参加した7名とガイド1名の8名で、今朝日原林道を車で入り、終点に車を止め、午前11時30分ころから大ダワ林道を登りだした。

今夜は雲取山荘に1泊し、明日山頂を越えて富田新道を下山する計画であった。

二軒小屋尾根を登り上げ大雲取谷沿いの登山道を約40分登った所に崩れた場所があって、大きな岩が登山道に被さっており、岩を抱くようにして一人ひとり通過した。何番目かに、おそろおそろ通過しようとしたSさんが、足がすくんだようになって手が岩から離れ、そのまま後の斜面に転落し大雲取谷まで落ち、50m程下の川原に倒れているSさんの姿が見えた。しばらくみんなでSさんの名前を呼んだが、Sさんはピクリとも動かなかった。ガイドのYさんが、少し離れた場所から大雲取谷に下り、Sさんの所に行き観察していたが、意識はないという。大きな声を出せば聞こえる距離で、下に降りたガイドのYさんから救助隊の要請を頼まれ、元気な女性ふたりに雲取山荘に向かってもらった。その後もう1組、彼ら2名が下の林道に下り日原に向かったものであった。

大ダワ登山道入口に着いた。事情を聞いた限りでは、以前にも救助活動があった、小雲取谷出合い手前の崩壊箇所辺りだろうと見当をつけ登り出した。大ダワ林道は大雲取谷の左岸沿いに大ダワまで続いている比較的緩やかな登山道だ。急いでいたので折り畳み式のバスケット担架を車に積み忘れ、長いままの担架を若手隊員が交代で背負って登った。体が汗ばんできたころ崩壊箇所に着いた。

山岳救助隊の姿を見付け、奥から女性登山者が2名降りてきた。遭難パーティのメンバーだという。ここが滑落場所で、石積みの一部が崩れて登山道が細くなった所に山側の岩が張り出しており、我々でも横になって大きな岩を抱き込んで通過しなければ通れないような場所だ。



足元から一気に50m程下の大雲取谷まで切れ落ちている。下に人影が見えた。遭難者と救助に降りたガイドだという。すぐ下降地点を探した。下に人がいるから真上からザイルで降りるわけにはいかない。上に行き小尾根を回り込むと比較的傾斜の緩い斜面が大雲取谷まで続いているところがあった。ここならザイルなしで下れそうだ。ブッシュに掛まりながら下り、沢

まで降りた。膝まで水に浸かり現場に向かったが、2 m程の滝が現れた。右岸の岩場を慎重に降りると、今度は8 mほどの滝に行く手を阻まれる。下は大きな滝壺になっており両側は切り立った岩場である。私の後に続いて来た隊員は、通過は無理と判断し登山道まで引き返して行った。下流の川原にツェルトに包まれ横たわっている遭難者と、傍で心肺蘇生を施しているガイドと思われる男性が見える。

ここを下るのは無理かと考えたとき、釣り人はどこかを高巻いて通過しているはずだから、どこかに踏み跡があるはずだと思いついた。先程下った2 mの滝を登り返すと、右岸に踏み跡を発見した。私はその踏み跡を高巻いて滝の下に降りた。

沢を涉って私が転落現場に着いたときは、ガイドのYさんが心臓マッサージを施していた。遭難者は今回登山教室に参加したSさん(62歳)だという。顔は腫れ、後頭部から出血があり、すでに心肺停止状態であった。「午後3時ころまでは自力で呼吸していた」とYさんは言う。「よし分かった、とにかく医師に引き渡すまでは最善の努力をしよう」と言う。「分かりました」とYさんは答えた。

それから分担して、私が心臓マッサージ、Yさんが人工呼吸を続けた。さすがYさんはガイドだけあって人工呼吸の際、要救助者の口元に当てる蘇生用マウスピースを所持していた。心臓マッサージ15回、人工呼吸2回を繰り返す。

上空には消防庁のヘリが旋回していた。ヘリにピックアップできなければ、人力搬送となる。滝の多い沢を降るすことはできないから、担架に乗せ一旦50m上の登山道まで引き上げ、そこから狭い登山道を搬送することになる。最悪の場合は夜間作業となるかもしれない。

20分ほどして、下流から警察と消防の山岳救助隊員も数名到着した。私とYさんは心肺蘇生を救助隊員に引き継いだ。結局Sさんの呼吸は一度も蘇生することはなかった。

大型ヘリコプターが侵入してきて、頭上30m程の所まで降下してホバリングした。すごい風圧だ。兩岸の立ち木が大きく音をたてて揺れ、木の枝が折れて飛び散る。航空隊員が1名、ホイストで降下して来た。隊員が地上に到着するとホイストを巻き上げ、ヘリは一旦離脱した。

航空隊員が持ってきたエバックハーネスを遭難者Sさんに着させ、誘導ロープをセットする。ヘリが再び低空で侵入してきて頭上でホバリングし、再びホイストのワイヤーが降ろされる。風圧の中、航空隊員のハーネスとSさんのエバックハーネスがホイストにセットされ、ヘリにOKの合図を送る。Sさんと航空隊

員はゆっくりと上昇していく。木の枝などに当たらないように下で誘導ロープを操作する。二人はヘリの中に消え、誘導ロープが切り離され、ドアが閉められた。ヘリはゆっくりと上昇し爆音とともに野陣尾根の裏に消えた。

午後4時20分、辺りに静けさが戻った。ヘリによる救助は、遭難者の救命のため、より早く医師に委ねるために強力な力を発揮することはもちろんだが、救助隊員の二次遭難の防止にも大きく役立っていることは事実である。これでヘリを使う事ができなかつたら、遭難者をまだ上の登山道にまでも引き上げることができていなかったろうし、日原林道まで搬送するには当然夜間作業になっていたことだろう。暗くなってから急な谷の側壁を登山道までの引き上げ作業や、狭い登山道をヘッドランプの灯りでの担架搬送などは困難を極める。救助活動は迅速な行動が要求され、足場の悪い谷沿いの登山道からの転落、滑落はもちろん、落石などによる二次遭難の危険性が高くなる。

今回の、深い谷からのピックアップなどはヘリにとっても技術的に難しいものであったろう。ヘリの性能と、航空隊員の操縦技術向上が遭難者の救命と山岳救助隊員の安全に大きく貢献していることは間違いない。

私たちは資器材を撤収し、登山道まで約50mの急斜面をユマーリングして、全員まだ明るいうちに登山道に登り上げた。下の大雲取谷を見ると、50mの高さがあらためて深く感じられる。途中に鮮やかなオレンジ色が見えたので、まだ隊員が残っているのかと目をこらして見ると、薄暗い梅雨空の山肌に映えるヤマツツジの色であった。

私たちは暗くなってから奥多摩交番に戻った。刑事課から連絡が入り、青梅総合病院にヘリで運ばれたSさんは、午後4時33分、医師により死亡確認がなされたという。残念というほかはない。

ここ数年ツアー登山、ガイド登山による山岳事故が増えている。中高年の登山熱を煽り、誰でも登れるような謳い文句で旅行業者がツアー客を募集し、少人数の添乗員、適格を欠くガイドによる登山で、遭難事故に結びついた事例も少なくない。また、何の前準備もなく、ただ参加して登らせてもらおうという安易な考えの登山者側に問題のある事故も多いようだ。

今回の事故も、転落箇所の登山道は誰が見ても「危ないな」と感ずる場所だ。ガイドにも遭難者にも相当の注意が必要であった。

梅雨の時期である。長雨で登山道が崩壊しているところは多い。事故のないことを祈るばかりだ。

H.17.7.10

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(5)

JR 古里駅北側上方に「稻荷の上」という山林地籍があります。稻荷社が祀られている上の所という意味ですが、町道黒指線の坂上直下、巨樹イヌグスの根元にある十日森稻荷が地名の起こりとなっています。

むかし、小丹波の酒屋に、越後からきた杜氏が狐つきになり、夜になると寸庭の方へ出かけて、コンコンと鳴くのです。そこで、寸庭の法印が狐落しの祈禱を行いました。逆に呪文を先に言われる始末で、祈禱は失敗でした。

これはいかんぞと法印は、7日間の荒行を勤め上げ、ある晩、コンコンと鳴きながらやってきた杜氏に向かい、今度は呪文を逆さまに唱え、杜氏は、苦しうにふるえだしました。法印が杜氏(狐)に理由を尋ねると、自分は、十日森の息子で、谷保の稻荷へ婿に行きましたが、小丹波の村芝居の時に帰ってきて、親類や友だちの所で遊びほうけていたために、谷保へは帰れなくなってしまい、人のよさそ

うな杜氏にとり憑きました、と白状しました。

それならと、法印と酒屋の主人が相談して、十日森の境内に新家を建てて、分家させることにしました。新しいお宮が完成した日、杜氏は、たくさんの油揚げを持って、十日森へ登っていきましたが、途中でバツリと倒れてしまいました。そして、杜氏が正気に戻った時には、油揚げがなくなっていました。めでたし、めでたし。

今、十日森の稻荷社の傍らには、分家したという写真の小祠が祀られています。(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌



山の花だより

植物のお手柄

奥多摩の春の野山では、じつに多様な花の彩りとの出会いがあります。春の先駆けとなる木の花は、アブラチャン、ダンコウバイの黄、フサザクラの紅などなど。野草にいたっては、枚挙にいとまがありません。花の色や造形にみられる生命の輝きを表現するには、「花いろいろ おのおの草の手柄かな」という松尾芭蕉の句がとても良く合います。

アブラチャン



ところで、野山を花を愛でながら散策している時、「自然はいくら近づいて見ても、その美しさを失うことはない。」(寺田寅彦)の言葉を思い出して、ふと足を止めて花を覗き込むと、思いがけない発見が

あります。例えば、春の深まりに合わせて咲くミツバツツジ。この花のおしべの中には、細長い花弁の形をしたものが時々見つかります。それでも先端には、黄白色の花粉袋(やく)がちゅんとついてきます。この現象は他のツツジ属にも見られます。これは、花が完成する過程で、おしべの一部が変化して花弁になる現象の名残りです。おしべは、花弁にすがたを変えることで、花粉を運ぶ虫をおびき寄せているのでしょうか。しかし、フサザクラの花には、花弁もがくもありません。美しい暗紅色をした細長いやくをつけたおしべが垂れ下がり、花が一か所に多数集まって咲くので、その美しさは遠目にもよく目立ちます。これらのおしべは「俺たちがこんなに綺麗なのだから、花弁などは無用！」とでも言っているかのようです。

時は桜の季節ですが、文豪、徳富蘆花は自著「自然と人生」の中で、「春来たりて、淡褐、淡緑、淡紫、嫩(どん=若い)黄など和らかなる色の限りを尽くせる新芽をつくる時は、何ぞ独り桜花に狂せんや。」と書いています。ちなみに、花は葉から変化したものです。野山の木や花の新芽が美しいのは、花と葉の生まれ出ずる時の一体性からくるのでしょうか。

(橋上一彦)

ガイドだより ～関東一の大展望台～

毎年奥多摩では、一番ツツジの開花と共に行楽のシーズンを迎え、青梅線はどの駅も観光客でにぎやかになる。4月の第2土曜日、駅前の大木戸稻荷境内では、その年の安全登山を祈願する開山祭が警察や消防の山岳救助隊をはじめ、関係機関や山小屋の経営者、登山者等が参加して厳かに執り行われる。

これを待ちこがれていたように登山者も一気に増え、奥多摩の山々はどこも華やかでくる。

この開山祭に参列しながら仰ぎ見るのが、本仁田山(1,224.5m)で東は高水山、西は雲取山方面からもしっかりそれと判る堂々とした山容である。特に多摩川右岸の御前山や鋸山方面からの眺めは、誠に素晴らしい。

この山の魅力にとりつかれてから四半世紀、過日記録を整理して次のスタンプを再発見、当時の思い出に浸ることとなった。



58.4.29

その頃、山頂付近は針葉樹に覆われて殆ど展望もきかず本仁田山の人気は今ひとつであった。そんな中で奥多摩町の有志の一人が頂上に櫓を組み、登山者に眺望を楽しませながら、ささやかな商いをしてきた。これは、昭和58年筆者が8歳と5歳の子ども達を伴ってこの櫓に登った時の記念である。

現在では、頂上付近の南東側が大きく切り払われ、視界の良い日には東京湾から筑波山まで遠望でき、まさに関東一の大展望台である。地権者のご好意に改めて感謝し、他の山々もそうありたいと願っている一人である。

この山は青梅線の鳩ノ巣駅から登るかまたは、終点の奥多摩駅から直接取り付くことができ、登りは約3時間、下りも約2時間で十分堪能できる。数ある奥多摩の山の中でも、厳冬期をのぞき年間を通じてファンの多い山でもある。

その反面どちらから登っても頂上直下が急斜面となっており、チクマ山を経由するゴンザス尾根ルートや花折戸尾根ルートは一般的ではない。特に、古い地図に載っている平石山との鞍部を経由するル

ートはすでに廃道となっている。山歩きの基本をはずすと、どの山でもしっぺ返しが多い。

現在では、ノーマルルートとなっている大休場尾根のコースでも、天候によってはマナスル西壁を登頂した登山家でさえ、昨春、雷に打たれて亡くなると云う悲しい出来事があった。

お互い安全登山を心がけたいものである。

(富士光男)

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- 1 5月15日(火) 新緑の海沢の滝めぐり
応募締切日 4月25日(登山)
- 2 5月18日(金) シロヤシオを訪ねるソバツブ山
応募締切日 4月25日(登山健脚)
- 3 5月24日(木) 新緑の奥多摩湖いこいの路に親しむハイキング
応募締切日 5月8日(ハイキング)
- 4 6月14日(木) 妙琴蟬を訪ねる倉戸山
応募締切日 5月8日(登山)
- 5 6月21日(木) 大塚山のコアジサイを訪ねる
応募締切日 6月6日(登山)
- 6 7月11日(水) 金袋山の巨樹を訪ねる
応募締切日 6月25日(登山)

* 募集人員：各回30名、参加費：500円

《 編集後記 》

再びカタクリが咲く春が巡り、この1年も心新たにのお便りをお届けいたします。

編集長：武田和代

次号は、平成19年7月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会